

社会運動の心理と論理Ⅱ

壽 里 茂

(一)

社会運動——とりわけ大衆運動的性格をもつ運動の成立契機を、われわれは前号において一応次のような観点から試論的に分析してみた。⁽¹⁾すなわち、社会運動とは、実は非常に複雑な要因——しかも独立変数的な要因の組合せによってその方向と運命とを異にするものであること、特にその諸要因のうちでも、客観的なあるいは主観的に構想された社会Ⅱ制度的状況、あるいは特定利害集団への民衆の心理的動員のメカニズム、さらには組織化における人と戦略などに注目すべきであることを強調した。こうした観点に立って、われわれは、社会——階層的な存在性というフィルターを通じてみた限りでの個人の運動への参加のモチーフ、「潜在的回心」(ホツファー)のあり方如何、つまり第二の問題を考えてみたわけであった。

従来もしばしば指摘されてきたように、そのさい最も注目の的となったのが旧中間層、ミルズのいわゆる没落した「ルンペン・ブルジョアジー」であるのは、その現代史において演じた役割からも当然といえは当然であった。たしかに、人口群としての旧中間層を考えても、それは量的にも社会運動の重要な支持基盤であり、現代における大企業の市場寡占の動向、労働組合の強大な組織力という強固な圧力に対してもつ不満と危機感の累積傾向はあきらかに認められてよいであろう。⁽²⁾だが、重要な点は、こうした一般化された旧中間層の社会像は必ずしもそのまま社会運動に結

びつくわけではないことを改めて確認しておかねばならない。そうした旧中間層のもつ運動への動員の潜在的可能性を現実に触発し、燃えあがらせるものは、個々の社会・経済構造のもつ個体的な枠組みの特性と、そこに与えられた衝撃乃至歪みの性質如何によるからである。それゆえ、例えば、少くとも現在の時点において日本の旧中間層は、その下層において、不安感なり政治的エキスパティズムの希求、あるいは労働者による大衆運動への非難と不満がいちじるしいのに対して、その比較的上層の経済的・社会的実力を保有している層は体制安定感なり保守的感覚なりを保持していることは別の機会にあきらかにしておいたところである。⁽³⁾

こうした点からすれば、旧中間層を「不満階層」としてはともかく、現状において「危機階層」ナンバー・ワンとして割切ってしまうことは事態の単純化のそりをまぬかれまい。こうした状況の限界は、当然具体的な運動の成立と展開過程の分析において問題となるところであるが、ともあれ運動への「潜在的回心者」を量的にも質的にも培養する基盤としての重要性は充分認められなくてはなるまい。

だが、歴史的にももちろん、現代——とくに大衆化状況の進行過程において、社会運動へのなだれ込みの可能性をもつ社会層は、なにも旧中間層に限られるわけではない。たしかに、コーンハウザーも指摘しているように「およそ（全体主義的）運動の社会的基盤に力を籍すものは、すべての社会階級である」といえないことはない。⁽⁴⁾すなわち、とくに運動成立の初期において最も多数の人的動員源と認められるのは、すべての階級のうちに散在する「社会的に追いたてられ、社会に附着（attachment）することのない人々」である。具体的には、社会的拘束から自由な知識人であり、中産階級中の限界的存在、孤立した産業労働者・農業労働者である。このうち、ホフファーの指摘するように、「現存する制度の基礎を徐々に掘りくづし、大衆を変化の觀念に慣れ親しませ、そして新しい信仰に対する受容性を作りあげるという予備的な仕事」を遂行するうえで、知識人の役割は極めて大きい。⁽⁵⁾しかし、差あって、われ

われは社会的に疎外されつつある旧中間層と並んで第二の社会運動の母集団、すなわちコーンハウザーとは異なった意味での孤立する社会的下層をひろく検討してみようと思うのである。

この場合、まず、社会的下層としてここで捉えようとする対象の社会運動への動員化のチャンスと、前と同じレベル、同じ契機においては必ずしも論じえないことを指摘しておくべきであろう。なるほど、一般には大衆運動なり社会運動なりが開花するうえで最も肥沃な土壌ともいふべきものは、「かなりの自由をもちながら欲求不満の緩和剤のない社会」であり、このさい、「個人的存在の不安や無味乾燥さ、無意味から逃避する場所」を提供するという限りで「効果的な運動であれば何にでも参加したがっている」潜在的回心者が相当量存在しようと考えられるであろう。⁽⁶⁾ そうした意味で今われわれが繰返し限定しておきたいことは、特別の主義なり計画なりをもつ特定社会運動の成立以前の、いわば前運動的狀況が問題だということである。そして、こうした点で、「現在も自分たちの人生も、償いえぬほど台無しにされてしまったと考え、それらを両方ともに浪費し破壊しよう」という無謀さ、混沌、無政府状態への意志ともいふべきものをもつ社会的下層、端的にいえば「スラングを作る人々」の役割を無視しえないわけである。

およそ「人々は支配的な社会的準則や諸関係から離婚することによって始めて既存の秩序に抗すべく動員される」のである。⁽⁷⁾ そして、この既存の社会―制度的状況を律しているもろもろのパターンからの離脱は、例えば既に取上げた旧中間層のようにいわゆる「New Poor」として具体的な個人生活に対する強い衝撃によって生ずることもありうる。だが、また一方、慢性的な「不利点蓄積」によって、社会的底辺に沈澱し停滞する大量人口群のうちから生ずることもある。まさに本論での主題はこの後者であるが、いわゆる社会的下層の意味を、ここでは現存社会秩序に対して心理的にも行動のレベルでも附着すること最も少ない人々の意味に捉えてよからう。コーンハウザー流にいえば、社会にコミットする可能性をもつこと少ないこと、また自らの利害を代弁する組織をもつチャンスに乏しいこと、

これこそ社会的下層の存在状況である。その限りで、組織された産業労働者が一応現在の制度的枠組み内で自らの階級的利害の進展のための動員と組織及び行動の統一化をみだしているならば、日常生活での現存秩序からの断絶・非連続感はずしも強いとはいえない。むしろ、こうした相対的に固定された動員組織の網の目からもれる大衆こそが問題なのである。

ここで述べた現在の社会にコミット (commit) するという程度は、現在の制度的状況から恩恵なり安定なりの約束をとりつけるという期待の程度に比例すると考えられる。⁽⁸⁾ もちろん、それは単に経済的利害に限るものではない。具体的には、個人がその日常的社会生活において、「その属する職業や団体や共同体にどのくらい附着しているかが決定的な問題なのである。」こうした意味で、社会生活における多元的な結節点である集団参加の形式的・実質的な乏しさは、社会的下層の特性のひとつといえるようである。

いま、こうした現存社会構造への期待の低下が上述の社会的孤立をみちびくこととともに、その重要な系として結果する心理的無力・敗北感なり不安定感なりが同時に問題とされなくてはならない。こうした感情状態を一定の水路にみちびき入れて、現在の否認・虚構の未来像の受容・憎悪と怨恨を動員する技術にこそ、社会運動の成否の岐路が存するのである。ところで、こうした過程の分析においてやはり旧中間層とは異なった独立的諸要因、あるいは媒介的諸要因が取出されてくるはずである。すなわち、社会的孤立といっても社会へのコミットメントの稀薄化といっても、こうした事態は急激な社会変動による強い衝撃効果の生みだしたものであるというよりは、むしろ慢性化された底辺的生活状況の結果であることは前提としてよからう。いったい、この社会的底辺を形成する大衆の慢性的な孤立と期待の乏しさがどのような社会運動への心理的“predisposition”を形成するものであろうか。多くの論者の指摘するように、そうした大衆こそとくに過激な運動に対して、同時に過激な参加態度を示すのはなぜか、その背後における社

会的下層のメンタリテイの構造的特性はなにか、なにが社会運動への彼らの潜在的エネルギーを培養するのであろうか。こうした社会的下層のいわば社会心理的風土を検討してみることが、本稿の目標である。

註 (1) 拙稿「社会運動の心理と論理」(Ⅰ) 早稲田商学第一五〇号参照。

(2) 「中小企業経営者の意識構造」民主主義研究所刊、一九六〇年五月。拙稿、「産業訓練」一九六〇年十二月号。

(3) 林知己夫・寿里茂・鈴木達三「ホワイトカラーの実態」「自由」一九六一年十一月号において旧中間層の上部が大企業経営者と意識構造において接近し、下層において相当の問題の認められる点に触れておいた。詳細については近刊「ホワイトカラーの生活構造と生活意識」(日本社会構造調査会)において比較的考察を試みてある。

(4) Kornhauser, W. *The Politics of Mass Society*, 1959, pp. 177 et seq.

(5) Hoffer, E. *The True Believer, Thoughts on the Nature of Mass Movements*, 1951. 邦訳「大衆」高根正明訳、一五〇頁。

(6) Hoffer, op. cit., (邦訳) 二八—二九頁、四六頁。

(7) Kornhauser, op. cit., p. 123.

(8) Kornhauser, op. cit., p. 221.

(二)

社会的下層の、社会に対するのコミットメントの稀薄さは、まず社会的上昇移動機会の相対的な障害の存在によってもたらされるといえる。そしてこの二つの現象の橋渡しをするものは、底辺大衆のもつメンタリテイである。

多くの社会的移動及び成層化の調査結果の概観の上にたったリブセット及びベンディックスの結論のうち、われわれにとって第一義に考慮さるべき事実は次の点である。⁽¹⁾ 第一に、まず個人の教育機会の享受は多く職業的選択の機会

に影響し、低い教育レベルしか享受しえない層が職業的評価における上層に達する可能性はますます限定される傾向がある。その理由は、まず高い教育レベルの達成ということ自体にすでに家族の社会的地位——ことに父親の職業的地位が強く規定的に働いていること、またその逆も成立しようという事実は、客観的に立証しようところである。

次に、逆の立場でいえば、早い機会に労働市場に入りこむ者ほど、将来の職業的生活に対する準備や計画を充分行ないえないのであって、教育レベルの格差の背後には、常に低い社会的地位の家族から出身する子弟は長い時間にとどまる教育制度の下にとどまることができないという事実が存在しているのである。もちろん、この家族のもつ社会的地位の尺度が、そのまま一方的に子弟の将来の生活機会享受に決定的影響を与えるとはいいたくない。例えば、下層から社会的上昇移動を実現し、あるいはより高い教育機会を捉えうるものは、現状では主として小家族からの出身という条件つきで認められる⁽²⁾。だが、ともあれ、こうした教育機会なり家族の社会的地位なりが相互に累積的にプラスに働くかマイナスに働くかによって、いわゆる「利点蓄積」乃至「不利点蓄積」という容易に動かしがたい事態が成立することはあきらかであろう。「貧困・教育の欠如・对人的接触の乏しさ・生活における無計画・利用しうる職業的機会をも捉えない傾向」——これらが世代間に持続・累積される可能性は極めて大きいのである。もちろん、問題は単に教育量にあるのではなく、そこに附随するものもろの動機づけ、未来志向的な価値、労働あるいは職業に対する観念などの培養が実は重要な条件であることはもちろんである。後にふれるように、社会的下層の相当部分にとって、社会構造自体は始めから自らの地位と連続的な体系ではなくて厚い壁によってさえぎられた世界として映じ、自らの行動と志向に容易に動かしがたい制限を課するものと感じられるのである。

こうした教育機会という基本的条件は、さらに相対的な社会的孤立¹という傾向をも促進する。すなわち、教育機会によって限定された職業的生活の次元において、家族的・教育的背景においても価値観なりメンタリティーにおいても

類似した人々のつくる世界に親しみ、その他の社会集団との接触乃至参加の可能性が相対的に乏しく、ますます孤立性が昂進されるといえよう。「外からの影響も彼らの限られた生活環境に波及することは少ない」のであって、こうした孤立性こそ、さまざまな社会的インフォーマーシオンから彼らを隔離させ、社会的判断と推論の能力の開発を停滞させ、より広い生活次元への関心を乏しくさせるのである。たしかに、こうした社会的・政治的諸現象をめぐるインフォーマーシオンへの接近は、組織なり集団なりへの帰属率が高いほど大であるといつてよいであろう。⁽³⁾その限り、組織された集団への参加の機会の乏しさは、逆にまた社会的孤立を促進させ、単に生活機会享受の特権のみならず心理的安定機会をも剥奪する傾向は充分認められるところである。

そこで、われわれは上述の前提条件をさらに事実的に検討してみることにによって、社会的下層のメンタリティーの方向がどのような点で社会運動への吸収可能性と接合しうるかをあきらかにしてみたい。

「個人の政治的オリエンテーションは、本質的には家族内部における社会化の過程の産物のひとつである」⁽⁴⁾。こうした意味で、政治的社会化における第一次集団の果す役割は最近とくに評価されてきたように思われる。この問題の焦点は、ある個人が政治的領域に足をふみ入れること―投票行動であれ時には棄権であれ、あるいは政治的関心の表明にしろ法規範に対する同調であれ―、こうした政治的行為は、「第一次集団における個人の経験によって形成される一連の predisposition によって大部分規定されるものであった」点を確認することに向けられている。⁽⁵⁾また、政治的パーソナリティと政治行動の研究も、第一次集団における権威自体のあり方がどのように政治体制における権威に対する個人の期待を左右するかに向けられているといえる。そして、個人がその生活の第一次集団的レヴェルで何を学び、いかに自己統制と能動的な社会的参与の訓練を身につけるかは、いわば民主主義の最も基本的な条件であると考えられているともいえるのである。もし、これに倣って考えるならば、社会運動なり大衆運動なりへの参加の

predisposition も、まず前述の客体的な沈澱の条件を課せられた第一次集団的な生活状況において、相当規定されてくると考えられるのである。われわれが取上げようとする調査結果は、主として中産階級と下層階級における第一次集団内の基本的社会化訓練の差であり、これが上述の客観的な孤立性と絡まってどのような社会的疎外にみちびくかをまず検討することである。

ところで、こうした調査はまずアメリカ的風土での結果としてしばしば引用されるものに四つあるが、相互に調査時点・サンプル数・調査方法等の違いがあり、しかもその根本における階級概念における視角のちがいを認めざるをえない。⁽⁶⁾ それゆえ、それぞれの詳細な比較は別の機会にゆづり、差当ってこうした調査結果において相対的にはあるが共通な結論ともいえるものに限定して、問題点をあきらかにしてみたい。

まず第一次集団、とくに家族における基本的社会化過程の差異は、主として階級―但しここでは相当操作的な概念として使われていることを附言しておきたい―「われわれの思考・行動・計画・想像力を大いに支配」するもの、「個人が観察し理解し、経験し行動するうえで意味ある社会的環境を創出する」ものとしての階級に起因するという前提が与えられる。もちろん、第一次集団から第二次集団の世界へという個人のまことにパーソナルな長い生活史は、こうした観点での一般化を必ずしも許さないにせよ、広義での階級的存性からくる生活状況の特性条件の浸透は認めざるをえまいと思われるのである。その点で、第一に取上げられた問題は家族内における幼児の躰のパターンにおける階層乃至階級差の存在如何ということであった。そして、このパターンの格差については、研究者によってその存在が明瞭に認められた場合と然らざる場合とに結果が分れ、必ずしも統一した結果は与えられていない。「およそ社会的な階級差は子供にとって異なった学習環境を表わすものであるから、子供の基本的訓練における構造化された差異が発見しうるであろう」という作業仮説も、訓練過程の低い次元、食事摂取・排泄訓練・離乳訓練などでは必ずしも

研究結果は根本的に一致していないといつてよい。だが、われわれにとつての問題は、ともあれ社会生活への動機づけであり、社会的行動パターンの受容・対象的知覚構造の形成であり、この点で、次のような結論をみちびいても大過はあるまいと思われ⁽⁷⁾るのである。

まず、全体的に中産階級におけるまさに中産的価値規範の摂り入れに対して、下層労働者はそうした価値を拒否する反感を抱く傾向がある。子供に対する生活目標乃至価値の設定は、第一に学校教育における子供自体のアチーブメントの積極的強調という形で現われる。すなわち、「概念・能力・態度において」学校教育の価値の達成を重視し、これに対応する報償・懲罰体系の設定が中産階級の家族に認められるいちじるしい現象といえるのである。⁽⁸⁾これを別の形で捉えるならば、比較的生活行動の自由をみとめながら、学校教育の与える価値物に対する組織的努力という形で攻撃性向の発現を許す。肉体的懲罰よりもむしろ愛情の拒否という手段に訴え、報償を強調するとともに、積極的な生活の組織化と親子間の心理的接触感を豊富にすることによって望ましいパーソナリティの形成を推進しようとする。

それゆえ、一般的に「両親の教育レヴェルが高ければ、それだけ子供に強く上昇への動機づけが注入される」といってもよいが、これはまず教育的価値物の獲得に集中されるのである。⁽⁹⁾だが、実はこうした学校教育におけるアチーブメントへの刺激は、早くから両親の設定した生活価値への同一化の基盤となるものであって、逆にいえばこうした過程は子供の同輩集団に対する、あるいはより一般的に子供の世界における価値に対する、愛着の稀薄化を生ずるといえるのである。生活理想の形成における第一段階において、すでに中産的子弟はいわゆる中産階級の価値に接合しているのである。例えば、価値としての野心、個人的責任と独立の強調、仕事の達成・技能の開発あるいは所有とすることに対する高い評価づけの態度、「欲求満足のみきのばし」(deferred gratification)―すなわち生活目標を時間的展望において遠くに設定し、その到達以前における自己統制・現実的欲求の抑圧を好ましいとする態度の培養、

「勤労志向」的態度、円滑な対人関係処理技術の重視、インパーソナルな競争場裡において自己の技術を最大限に發揮することこそ望ましいことであって、そのための新しい情況に対する適応能力と時間・能率・計画における合理性の強調など、こうした一連の中産的価値と称されるものが家族内訓練を通じて子供に導入された時、社会的世界のひろさと延長、そのいかなる点に自らを位置せしめ、いかなることが可能であるかの知識が形成されるともいえる。そして、重要なことはこうした価値態度への水路づけがしばしば利点蓄積の形で繰返されてゆき、一方社会的下層にはその可能性が乏しいことなのである。

さて、問題はこうした観点で捉えられた中産階級的生活理想の訓練に対置される社会的下層の特性である。このさい、まず第一に指摘されてきた点は、社会的下層においてはこうした中産的価値に対する攻撃が主として両親によってなされていることである。すなわち、下層家族における両親のもつ上記とは異質の価値観は、本来彼らの職業的生活自体が蓄積された教育的訓練乃至は技術を必ずしも必要としないことから、学校教育の価値よりも学校外の価値の強調に向けられる、それゆえに、彼らの「街頭的价值」(street-corner Value)の子供への伝達は、同時に身につけようとしても可能性の乏しい中産的価値の否認乃至攻撃という形をとることが多い。しかも日常生活情況において、子供にとってこうした「街頭価値」への非同調あるいはこれからの逸脱は、強い非難・嘲笑・排斥といった重大な脅威を及ぼすものでもある。一方で自分たちとは異質なものと感ぜられる世界に対する劣等感から、自らの生活状況において獲得した価値を疑いながらもこれに執着し、この世界を脱出するのは長期的な欲求抑圧と計画によるよりもむしろ幸運あるいは偶然的な機会しかないと考えるのである。いわば中産階級の未来志向的態度に対する「濃密な具体的生活一への埋没があきらかに認められる。彼らは自らの力・地位について疑いを抱き、時には罰と恥の感情においてもいちじるしく、自分たちの生活経験によって律しえない新しい生活状況への接触を恐れる。それは、逆に過

去の既知の生活経験あるいは生活状況への頑強な執着の態度を生みだすのである。「自分の環境を恐れている人々はその境遇がたとえどのようににみじめなものであっても、変化のことを考えるものではない。」そして生活様式が不安定で自分の生活環境を支配できないとき、「慣れた試験ずみの物にしがみつく傾向がある」といえよう。⁽⁹⁾これこそ不安定感に逆らうある意味で最も有効な方法だからである。そして、蓄積された欲求不満から、微細な刺激にも敏感に反応し、情緒的にも極めてアナキックかつ容易に統制しえないといった点に彼らのメンタリティーの特性を規定する要因がみられるのである。

さて、以上のような階級の函数として中産的・下層的な家族の生活態度における対比は、実はその社会的知覚構造に ついてもこれを求めることは不可能ではない。例えば既にアイゼンクはその政治心理学において、W・ジエームズの用語に従って柔軟な心性(tender-minded)と頑固な硬い心性(tough-minded)の対照を提出している。⁽¹⁰⁾すなわち、ジエームズ流にいえばいかなる時代にあっても硬い気質なり心性をもつ人々は柔軟な心性をもつ人々をセンチメンタリストと考え、逆に柔軟な気質をもつ人々は硬質な気質をもつ人々を無感覚で粗野だと見做す傾向がある。こうしたコントラストを、すでに指摘したような中産対下層家族の子供の社会化における差異の発見を基礎としてアイゼンクは中産階級の思考と労働者階級の思考という形で展開している。彼によれば前者は主として論理的・理論的な論争に興味を寄せ、後者はこれに對してむしろ日常的な快楽刺激の直接の充足に関心を向ける。この点を、デイヴィスはすでに幼年期からの生活経験における深刻な飢餓恐怖―「食物は愛なり」の経験的準則に帰因させているのである。

こうした対比からいえることは、共産主義なりファシズムなりの左右それぞれ両極への運動への帰一は、硬い心性をもつた、権威主義的で政治的寛容やソフィスティケーションに對して反感をもち、白か黒かの二分法的思考をもつ人々に可能性が多いということである。それゆえ、中産階級における共産主義なりファシズムに對する回心者は下層

と比較しても穏和であり、また彼らがリベラルであり保守である方向に向っても決して“extremist”とはならない。どちらの場合でも硬い心性の持主の方がやはり一層極端に走りやすい傾向が指摘されている。

ところで、こうした心理的傾向がそのままある階級の政治的志向を規定するとはいえない。またこの傾向によって一定の傾向律を設定するわけにはいかないが、ともあれ潜在的可能性のひとつを示すと考えても差支えなからう。そして、今一步検討してみる必要ありと思われる点は、このような硬い心性・柔軟な心性という仮説的な類型をいま一層具体的な枠組みのなかで肉づけが可能かどうかである。

「対象たる事物の構造に対する感性というものは、その知覚された対象に対する学習された能力の函数である」⁽¹⁾ この学習された能力は、ベルンスタインの調査についてみても、中産階級と下層労働者階級では次の点に格差の存在が認められている。すなわち、一般に社会的下層の知覚のレベルそのものが質的構成を異にしている。端的にいえば事物の構造的認識よりも内容的認識が優越している点に、社会的下層の知的特性が認められているのである。すなわち、事物の内容的認識とは、結局事物の構造のもつ論理的意味の把握や異種の対象間の境界づけが極めて漠然とした場合に現われるものである。対象認識において選択的・意味的な関連づけを伴うことなく、また同時にそれは対象の全体的枠組みにおける位置把握に至らないから知覚そのものの外延は非常に限定されているということができる。そこでこの内容的知覚のもたらすところは、極端な場合単に一連の異ったアイテムに対する直接的個別的知覚にとどまるのである。例えば経験の分野での個人的・具体的経験への固執、これに不適合なものへの恐怖乃至反感が認められる。

一方、中産階級のより柔軟なメンタリティからすれば、生活空間は一般に統制されたものとして受取られる。現在の生活時点におけるある現象は、それぞれが単に既成の事実としてではなく新しい関係づけへの出発点となるという意味で展開可能であるといえよう。それは、個人個人の生活経験による着色はあっても個人的レベルでの概念化

(conceptualization) が可能とされる。こうした知覚構造は、社会的行動においても手段—目的連関の設定、換言すれば価値志向的な手段としての行動の編成化をも可能にし、現在の社会的諸関係なり生活基盤なりをこうした目標達成への道具としうる安定的な行動準則の設定が現われてくるのである。このような形での社会化の訓練は、ペルンスタインによればまさに中産階級特性を作るものであって、学校教育の価値とも矛盾することはない。「学校の社会構造（自体）が与える教育の目標と手段は、中産階級の子弟がこれを受容し対応し開発しうる枠組みを創造する」ものであるとさえいえるのである。⁽¹²⁾ 一定の報償体系の下で自己を知覚的にも情緒的にも安定した社会関係のうちに定位せしめる可能性は、社会的下層には乏しい。社会的下層における家族的権威の行使は時として極めて恣意的であり、また知覚のうえでも長期的目標に対する行動の編成よりも、「自己の客観化」に欠ける漠然たる未来像が形成されるにとどまり、現在の行動自体が価値化される傾向が大きい。目標—手段図式の短絡化・現在の欲求の充足あるいは剝奪への関心の集中、時間的展望と概念化された生活規準の乏しさなどが、その特性といえないであろうか。

もちろん、こうした対照は上述の社会学的あるいは社会心理学的調査においてあきらかに統計的有意差をもって示されたものであるにせよ、個人のパーソナリティのすべてに現われるものでもなく、必ずしも個人的特性を示すものではない。いわば、集団的特性と解釈しなくてはなるまい。それにしても、こうした集団的特性が社会的・政治的諸問題とめぐる判断あるいは態度に現われた場合、同じように対比的に示しうるであろうか。次にその社会的知覚の方向について取上げてみたい。

註 (1) Lipset & Bendix, *Social Mobility in Industrial Society*, 1959, pp. 189-90.

(2) Lipset & Bendix, op. cit., pp. 192-197, 240-241. リンゼット・ベンディックスは、「こうした社会的上昇の機会のはばと機会があってもその把握能力の低さを問題にしているものであって、本質的な、例えば I・Q の高低といった問題はあまり相

(三)

社会的下層が政治あるいは社会のダイナミックスに対して無関心であることはしばしば指摘されてきた。だが、その政治的・社会的なアパシーを指摘することは容易であらうが、それを以て全体像を画くことは危険である。その内部には、「急進的な貧困層」もあれば、「反革命・極右の最先端にたつルンペン・プロレタリアート」となる可能性をもつ層も含まれる。しかし、一般に、「社会的底辺に沈没する貧困のムードは、社会や政治を下からつき上げていく新しいエネルギーの醗酵地帯」を必ずしも作らないという傾向は、たしかに認められてよいであらう。⁽¹⁾しかし、問題の第一は、こうした消極的・諦念的情緒なり社会的アパシーなりが常態におけるあり方であっても、果して危機的事態が直接に滲透した場合はどうかという点である。第二に、第一の点に関連してそうした社会的アパシーそのものの背後にかくされている様々な社会心理的な判断の方向と条件をさらに高い次元で検討することが問題となる。なるほど、彼ら社会的下層にとって、一面、「現実社会の動きはそこ、ひに於ける如くにドンヨリと映じているにすぎない」にせよ、その具体的なメンタリティの働きはどのような形をとるのであろうか。この点で、第二の問題をまず、上述と同じく一種の社会的下層の集団像という形で検討してみたい。

社会的下層の抱く現実の社会像は、ダーレンドルフによれば連続としてでなく、非連続な二分法 (dichotomy) によって描かれるとされる。⁽²⁾すなわち、中間層は、自らの社会的位置における位置の定義づけにおいて、自分たちより高いレヴェルにあるもの・自分たちより低いレヴェルにあるものを評量することによって社会構造自体を自らを中心とした“hierarchy”、すなわち上下の連続した階層組織と見ることが可能なのである。そして、新中間層的な典型的事例から考えても、企業なり官僚機構なりにおける頂点からの制度化された地位体系の一点に自らを定位づけること

もできようし、心理的には準拠集団としてのトップ・レヴェルを見あげ、社会的地位に附着するさまざまなシンボル・身分を目指す大なり小なり個人的な競争がその積極的な生活の動因となりうるのである。それゆえ、中産階級ほど社会の支配的価値体系に同調的だともいえる。すなわち、その同調行動は、個人的目標の達成という代償によって報いられるからである。ダーレンドルフは、これに対して、社会的下層といっても労働者階級意識の基底にある敵対的な社会観を対立させている。つまり、支配者集団は、現在の秩序を整序されたもの、正当性を備えたものとして比較的満足感をもって見てゐるのに対し、ここで規定された被支配集団は、現在の体制に断裂を認めることを通して、自己の特権剥奪感の根拠を求める。現在の社会体制のイメージは、強制と断裂という基調でいられられて構成される。もし、中間層が同じように断裂を感じたとしても、それは不愉快であつてもやはりやむを得ない現実として意識のうちから追放してしまう。さて、こうした対照がわれわれの問題にとって意味ありとすれば、それは常に敵対的な、二分された社会像をじっさいにどの程度社会的下層が抱いているかどうかということより、まずこうした社会像の階層的な差異が成立しているという点である。⁽³⁾

そうしたイメージの成立契機は、すでに検討してきたように第一次集団の世界から第二次集団への移行においていちじるしく豊富に存在するといえるのである。つまり、第一次集団で形成された国家なり社会なりに対する「一般化された態度」——その信頼乃至不信、秩序に対する敬意なり無視なり——は、階層的存在性を反映しているであらうし、後に演ずべき社会的役割として何が期待されているかによって、第一次集団の与えた役割訓練は、そのまゝより広い社会的世界のさまざまな問題に対する反応と行動に影響する可能性は非常に大である。例えばブライスが「近代民主政治」において力説しているところからすれば、「およそ十分な民主政治の本質的要素のひとつは、国民のかなり多数が小自治集団の活動に積極的に参加する経験をもっていることである」⁽⁴⁾。第一次集団的活動への参加の機会が大で

あるほど、政治的参加のチャンスもまた大であろう。こうした傾向律を攪乱する要因は、第一次集団が第二次集団の錯綜する世界に社会的に融合しえないこと、逆にいえば、現存体制から第一次集団が望ましいと評価しうる価値物を受取っており、また情緒的紐帯によって結ばれているとは感じられていないことである。すでに指摘したような社会への附着 (attachment) 感の喪失、あるいは社会的に根無し草に (uprooted) になった人々の大量の増加は、社会関係と社会的参加の基盤を広汎にくつがえす危険がある。例えば、ここで第二次集団、例えば職業集団は、これを通して人々が「組織に参加する唯一の原理であり、自己表現の唯一の手段である」⁽⁶⁾。そこからの離脱とそこから受ける諸々の経済的・社会的・心理的価値の喪失 (失業) であれ、あるいは、そうしたものの相対的附着度が少ないほど、社会的孤立と社会の動きへの無関心が支配的となるであろう。

それゆえ、ダーレンドルフの指摘するように尖鋭な斗争意識に動員されるかどうかは別として、敵対的な社会のイメージが組織された労働者階級に組織されていることを認めてもよい。しかしわれわれの問題であるそれ以下の下層では、不安で権利の剥奪から生ずる卑屈感にとりつかれた心理が存在していることを見過してはならない。それがどのような社会的イメージを構成するかが問題なのである。

ラスウェル流に言えば、多くの政治的行動は私的な要求や情緒が政治の領域に投射・反映したものだともいえる。だがしかし、通常こうした行動の通路にさえ接近しない非政治的—非社会的存在がいかにして動員させられるかが考えられなくてはなるまい。それは、経済的・社会的利害という形での要求の挫折というには事態はあまりにも慢性的である。むしろ、第二節で触れたような心理的基盤にもとづく社会的イメージを強調しなくてはなるまいと思うのである。

社会的下層の経済的不安・職業的経歴の安定性の欠如、職業満足度の低下、こういった点とともに社会的地位の低

さは、むしろ社会的イメージの構成においてそのまますぐに敵対的感覚を醸成するというよりは、むしろ怨恨 (resentment) 感なり不満感なりを常に潜在的に増加させるといった方がよいと思われる。⁽⁷⁾ およそ「人が低い社会的評価を平気で受け入れるだろう」とは考えられないとすれば、もし機会と可能性があれば個人の努力を通して社会的上昇を志向するか、あるいは、集団的努力を通じてなんらかの行動に赴くであろうと考えても差支えあるまい。しかし、問題は、ある社会構造がどの程度、こうした機会なり可能性なりについて開放的であるか閉鎖的であるかである。上昇移動の開放性が単にたてまゑとしてだけでなく、実質的にも大であるならば、それだけマートンの指摘したような「同調型」の行動が増加するであろう。⁽⁸⁾ このような事態から予期しうることは、例えば比較的経済的水準の上昇した労働者層の保守化であり、あるいは、労働者階層の相対的な政治的無関心化である。⁽⁹⁾ 逆に、閉鎖的要素が力と作用を加えるほど、彼らは独自の政治的行動形態を推進するともいえる。しかし、こうした網の目から逃れる層としてやはり社会的下層—マートンに従えば改新型でもなければ反逆型でもない敗北型が存在するのである。そこには、コンスタントに政治的・社会的無関心というよりそうした状況との不連続 (discontinuity) 感が支配している。ただ注意すべき点は、こうした積極的同調か、敗北あるいは“withdrawal”—すなわち、逃避かの両極に向う段階にはさまざまな場合が考えられるということである。例えば、上述のように社会的下層がその展望を欠き、非社会化される、あるいはその社会的附着を失うといっても、相対的にしかいえない問題であろう。アメリカ下層階級の社会心理についての検討をみても、それは単純な「無関心」的色彩で覆われるわけではなく、一方で「無関心かつ従属的なメンタリティが働いている」からといって、そのアスピレーションが全面的に放棄されてしまっているわけではないのである。⁽¹⁰⁾ いくつかの調査例を通じていえば、その願望水準の高さに比較してむしろ現実の手段が控え目にすぎること、すなわち現実的な生活機会自体の限定されている状況に対する「合理的適応」として現実水準を自ら制限している事

実があげられる。「願望と現実の理解との間に不断の前進と後退」がミックスして現われるといってもよからう。問題は、そうした限りにおいての無関心であり、不連続感である。

しかし、それにも拘わらず、こうした「不満をもち、心理的には根無し草で、生活の失敗者、社会から孤立した経済的に不安定で無教育かつ単純で権威主義的」な人間を多くの国々において過激な社会運動が動員しえた所以はどこにあるのであろうか。⁽¹¹⁾ そうした社会的下層の抱く社会像は、第一にソフィステイクーションに耐えられない単純な場合が多いということに特性がある。既に指摘したように、彼らのもつ時間的展望性、その視界は制限されており、想像力といってもよし、あるいは経験の内面的再構成とその抽象化といってもよいがそうした点において必ずしも組織的でない。⁽¹²⁾ そうした意味で、日常生活行動への関心の限局が現われ、さらに「いかなる形のいかなるレベルの情報に接近すること」も少なく、仮りに相当量の情報をもつとしてもそれらを整序すべき一般的な観念の枠組みをもつことなければ、あるいは「一個の歴史的・イデオロギー的過程についての観念」をもつこと少なければ、それだけで方では被暗示性（キャントリル）を常に昂進させていくことになるであろう。また、「既存の判断あるいは前提に對立するような見解を検討する」だけの知的・教育的訓練に乏しければ、そうした人々の判断は最初に心に浮ぶ所属集団の与えるステレオタイプ化された暗示に従って行われる危険、まさしく「硬い心性」の特性が現われるであろう。また、ベルンスタイン流に言えば、問題状況の具体的な内容に對しては急速に反応するであろうが、他の事態との概念的區別を行うことなく、最初の印象を容易に変更しえないのである。

とくに形式的あるいは非形式的な社会的組織から相対的に孤立した彼らの形成した既製の固定された乏しい概念枠によっては律しえられぬような新しい事態に對して、「戸惑って不安を抱いている」層ほど、しごく単純な計画でも無批判に受け入れるであろうし、また逆にいえばできるだけ単純化された判断枠を求めようという潜在的欲求が強

化されるともいえるのである。「混沌した心理的世界に秩序をもたらし解釈」は、それが至福千年説 (chiliasme) であろうと、あるいはそれが特定のシンボルなりスローガンに結晶されたものであろうと、要は「不確定と迷いの状態」から抜け出すために非常にもつともらしく思われればよいのである。¹³⁾ まず、黒か白かの単純化された二分法的判断が必要とされる。前節で指摘したように、一旦習得されて絶対的なものに高められた判断枠は、非常に硬^{リジッド}なものとなり、それに合致しない経験的事実をばらばらにぶつけても容易にこれを変更しえないという硬い心性ほど、一度その基礎が崩れればかえって脆弱であろう。その場合、新しい判断枠、しかも単純なそれへの欲求はいっそう熾烈となり、まさに黒か白か、最も急速かつ直截に現状を両断しうる解釈が必要なのである。そのさいに観察しうる心性は、非寛容 (intolerance) のそれであり、意見を異にし立場を異にする党派に対してはいささかの論理的根拠も正当性をも認めようとしない。政治的判断においては「漸進的な政治変化」というような観念はとても耐えがたいものとなるのである。それゆえ、しばしば指摘されたように多元的な党派間の索制と均衡、妥協と討議よりも、一党と政治的エキスパーティズムへの接近が生まれる。¹⁴⁾

一方において、社会的下層は、政治に対しても社会に対してもそこから最少の利益しか受取っていない存在、「社会秩序に参加する機会の最も少ない」存在として自らを意識し、いわば常に無視されているという感情に満たされ、それが「集団的劣等感」にまで発展する方向も充分考えられる。そうした限りで、「既存秩序への忿懣や敵意」は常態的には反応すべき権威なり、参加すべき共同体なりをもたないままに無関心状態に沈黙しているのである。しかし、「生活が不毛で不安定な人々は、尊大で自信のある人々よりも遙かに喜んで人の命令に服従するように思われる」というホツファーの体験を通じた原則、「独立を放棄して…進んで自らの生活の管理権を投げ出す」ことを願い、従うということ「混沌とした日常生活の中の唯一の確実な点として求める人々」——すなわち現状において無関心ではいる

が内在的性向として強者への従属、心理的孤立からの解放、抑えられた敵意の弱者への発散、こうしたいわゆる権威主義的人格像は、中産階級より労働者階級に、労働者層のうちでも組織されることなく、さまざまな程度で社会とのきづなから分離している層ほど大であると結論できないであらうか。¹⁵⁾

ひとたび動員された怨恨と憎悪は、空虚な人生に意味と目的とを与えることができる。「人生の目的を失って悩んでいる人々は、自分自身を神聖な大義に献げるだけでなく、狂信的な不満を育てて新しい満足を見出そうとする。」この両者の無限の機会を与えるもの、それが社会運動——とくに退行的な大衆運動なのである。

註 (1) 「貧困層の政治意識」日本社会調査会、一九五八。

(2) 「宗教心理の研究」古野清人（一九四〇）三〇八—九頁参照。

(3) Dahrendorf, R. *Class and Class Conflict in an Industrial Society*, 1959, pp. 284 et seq.

(4) Dahrendorf, op. cit., pp. 289 et seq.

(5) Bryce, J. *Modern Democracy*, 1921, Vol. I, p. 132. なお政治的社会化における第一次集団の役割を見直し、これを正面から取扱った *Verba, S. op. cit.*, pp. 49 et seq.

(6) Kornhauser, W. op. cit., p. 164.

(7) Lipset, S. M. op. cit., pp. 237-8.

(8) 拙稿「現代社会とマシーンの問題」早稲田商学、第一四六号参照。

(9) Lipset, op. cit., pp. 206, 242.

(10) Barber, B. *Social Stratification*, 1957, pp. 307-315. Knupfer, G. "Portrait of the Underdog." *Public Opinion Quarterly*, 11 (1947), pp. 103-114.

(11) Lipset, op. cit., p. 175. Heberle, R. *Social Movement, Introduction to Political Sociology*, 1951, p. 10.

- (12) Bernstein, op. cit., pp. 161 et seq.
- (13) Cantril, H. *The Psychology of Social Movements*, 1941, pp. 65 et seq.
- (14) Lipset, S. M. op. cit., pp. 109 et seq.
- (15) Hoffer, E. op. cit., (雑誌) 133頁, Mackinnon, W. J. & Centers, R. "Authoritarianism and Urban Structure", A. J. S., Vol. 61, (May) 1956, pp. 610-620.

(四)

上述してきたように、社会的下層にとくにいちじるしく現われるさまざまな心理的性向の特性は、ひとりひとりの人間については極めて多岐にわたる個人差が存在することはもちろんである。われわれは社会の底辺大衆がむしろ極めて異質の諸層を含んでいることを認めるのにやぶさかではない。それゆえまた、既に指摘したような下層の人々の幼年期における生活訓練の階層的性格が果してどの程度将来の社会的行動に対する心理的な傷として残るか、また教育乃至知的背景の貧困、社会的上昇移動の可能性、生活史及び自己を取巻く社会への展望の限界、権威主義的志向の強度、さらにはその日常的な心理構造や政治社会的無関心などは、ある特定個人について比較してみるならば、そのレヴェルや内容において無限の多様性を示すことになるだろう。だが、それらを一度階層的存在性というフィルターを通してみる時、あきらかに個人差というものの果す役割はあまり大きな影響を与えなくなると思われる。いわんやそれらが停滞的状况においてでなく、深刻な混乱と強烈なアップピールが適合した状況において考えられるならば、殆どネグリジブルな可能性の方が大となるのである。

いうまでもないことであるが、こうした集団的に考えられた特性としての心理的傾向がそのまま社会運動に結びつくわけではない。問題は、第一に常態的に不満なり怨恨なりを抱いている人々がさまざまな外的刺激要因の組合せ如何によって、突然政治や社会的なイツシユの分野にひきずりこまれ、そして「既知の問題すべてに失望し、輝かしい未知の未来にすべての希望を托する」に至るさい、「将来に対する信頼」とともに「現状との絶縁」を激しく要求するに至るさいにどの程度動員されやすいかということである。こうした動員可能性をつくるものこそ、すでに指摘したように中間層では新しい中間層より古い中間層が、中間層より下層が、下層でもより組織されること少ない底辺大衆がより多くわかもつ心理的な傾向(propensity)なのである。

それゆえ、第二に展開せらるべき問題は、以上に展開した階層的存在性を通してみたかぎりの個人の生活心理状況を触発する客観的状况如何であろう。それも、単に「大衆化状況」における大衆運動という一般的な枠組みをもってしてでは事態の複雑性を見極める上で不十分のそしりをまぬかれまい。運動の豊かな土壌となる特定社会の構造的な流れ、歴史的規定条件、心理的シックスを与えるべき社会的危機の鋭さ、そして運動の指導の側における組織化の戦略と武器、こうした独立変数として作用する要因が検討されなくてはなるまい。⁽¹⁾それゆえ、社会運動の心理はそれ自体で顕在化するものではなく、むしろその論理、特定状況における集団的・社会的文脈に導入された場合に激発し、露呈するのであって、そのみで方向を必ずしも予測させるものではないのである。特に我が国におけるこうした組織と運動の特殊日本的な性格は、社会的諸層の心理的基盤をつくる制度的・文化的条件とともに従来の諸研究と合せて比較的社会心理学的に分析される必要は大きいと思われるのである。⁽²⁾

註(1) Bendix, R. "Social Stratification and Political Power," Bendix, R. & Lipset, S. M. Class, Status & Power, 1956. pp. 602-605.

- (2) 参照「ホワイトカラーの生活構造と生活意識」一九六二年、日本社会構造調査会。土屋清他、筆者をふくめて七名がホワイトカラーを中心に各階層別に対照的な政治・社会意識を検討した。